

評論

下羽友衛の人間学的教育学

—「持続可能な開発のための教育に向けて」「地球市民になるための学び方」(全3巻)

下羽友衛/東京国際大学国際関係学部 下羽ゼミ編著 日本図書センターをめぐって—

佐島 群巳

帝京短期大学

The Anthropological Pedagogy of TOMOE SHITABA

Tomomi SAJIMA

Teikyo Junior College

(受理日2006年2月1日)

1 評論の動機

ここで評論として取り上げるものは、下羽友衛教授とゼミ生との学習と研究の歴史的所産である「地球市民になるための学び方」(全3巻)についてである。この刊行物を読んでいく中、私は、下羽ゼミの10年間にわたる切実な今日的・日常的な課題から地球的規模の課題まで包摂した追求してやまない意欲と実践力を垣間見ることができたのである。

著書には、それぞれ副題が付されている。第1巻「知識と行動をつなぐ」、第2巻「フィリピンにふれ、アジアに学ぶ」、第3巻「現場体験学習のもつ教育力」となっている。

私は、本書を手に入れたとき大きな衝撃と迫力に圧倒され、目の覚めるような思いであった。三巻を通して、下羽ゼミの偉大な学習力、研究力、行動力としての「人間力」^{ヒューマンパワー}を実感したのである。

私は、表記の著書を読み進めながら、「評論」として下羽ゼミの科学する力、自己変革する力、他人とかかわる力の持つ力強さを評価する必要性があると意識するようになった。

それは、大学におけるゼミの一般的活動と異なっていて、ゼミ生の学ぶ目的、対象、方法が融合された活動が美事に結実しているからである。下羽ゼミは、教授と学生、そして、卒業した先輩達

とが現実的課題及び地球的課題に対する疑問と矛盾をかかえながら相互の関係性を維持しながら活動に没頭している。

下羽ゼミの活動は、我々大学人にとっても、学生にとっても、学ぶべき点が多い。下羽ゼミの目指すものは、ゼミの活動を通して、地域から地球へと存在する人間環境の中であって、人と出会い、環境社会のもつ意味を追求する過程に「地球市民の存在構造」を形成しようとするものである。

そこで私は、次の諸点にスポットをあてながら下羽友衛のもつ科学的、教育的意味を評価していきたい。

- ・下羽ゼミの学習と研究の方法論は「地球市民になるための資質・能力の形成」において有用であったかを解明する。
- ・下羽ゼミ生は、ゼミの諸活動に参加しながらどのように自己変容・自己形成を図ろうとしているかを明らかにする。
- ・下羽ゼミ生の学習と研究の成果をどのように共有し、発展させたかを明らかにする。
- ・下羽友衛教授のもつ教育理念と実践的指導力を現代教育学的視点から検討する。

2 下羽ゼミの学習と研究の方法論

下羽ゼミの学習と研究の実践的過程は、次の三段階によって成り立っている。

- ①現場体験学習
- ②現論学習
- ③発信活動

この三つの段階は、学習と研究の方法能力形成と人間関係力形成を図りながら「地球市民の育成」を深化させるとともに学習主体をしての下羽ゼミ生自らが自己変容、自己形成を目指すものである。以下、下羽ゼミ生の学習と研究の実践的過程のもつ科学的、教育的意味を論評していきたい。

(1)「現場体験学習」における人間への共感

現場体験学習は、フィールドワークという意味を含むものである。現場体験学習は、学習と研究の対象、方法を明確にしなければ成立しない。

下羽ゼミの取り上げた学習と研究の対象は、国内外の環境世界に目を向けている。

海外では、フィリピン、韓国、ドイツなどが取り上げ、国内では、巻町、敦賀市、双葉郡、豊島、御嵩町、くぬぎ山、足尾、屋久島、竹の内、松代、水俣、広島などである。

研究対象が決まれば、事前研究において「何のために」「何を」「どのように」と目的・内容・方法を統一的に把握することである。その前提として対象のもつ社会的、教育的現象への疑問と矛盾を一人一人のゼミ生が自覚的に把握することから出発する活動である。事前研究では、現地の関係資料、地図などの文献的研究から取り組む。この段階は、現場体験地域をイメージ化し何のために、何を明らかにするのか仮説的に検討するのである。

いよいよ、現地へのりこんでいく。ゼミ生にとって初めての現地であれば、不安や葛藤が生じることは当然のことである。がしかし、ゼミ生は、現地で研究対象に向かい合い渾身の力をこめて対応するのである。文字通り「体当り」である。この現場体験学習においてゼミ生は、事実、現象を見つめ対峙し「事実・現象に対して素直に感動と共鳴していく」のである。そして、その事実・現象から仮説を検討する。まさに、オーギュスト・コントの「実証的精神論」の科学的方法を駆使して、事実・現象から疑問や矛盾を解き明かしていくのである。これは、事実から推論判断することを重視するわけだ。

下羽ゼミ生は、現場体験学習によって得られた情報を持ち帰って大学キャンパスのある身近な「川越の事実・現象」と対置し、地域へ回帰し一層現場体験学習のもつ意味を自己対象化していくのである。現場体験学習のフィールドは決して他人事としてとらえるのではない。自己の問題とし自己存在の在り方に結合させるのである。

現場体験学習の実践を例示してみよう。

「公害問題」の原点といえる足尾へ出かけて、目に映るもの、聞くもの一つ一つが公害という事実・現象の検討であり、発見であるのである。

足尾山脈を眺めながら「あれ、どうして?」「なぜ、はげ山になっているのか」という疑問と矛盾を抱くのである。学生の眼は、自然の景観のただならぬ様に凝集されていくのである。直観的に「はげ山」を見ながら鉱害の恐ろしさを知る。1877(明治10)年古河財閥が足尾銅山を買収してからはじまった鉱害である。100年経った今日においても「はげ山」はもとどおりにならない。案内してくれた人から銅の製錬に生じた亜硫酸ガスによる森林枯渇や銅を掘った後の廃鉱の中に砒素が含まれたものが渡良瀬川に流れ、川の洪水のたびに米や麦が取れなくなったり、魚類の大量死したりする事件を知らされる。

その時の農民と共に衆議院委員田中正造の鉱害防止に立ちあがったことを現場体験学習で実感した学生たちは、この足尾の問題をさらに地球上の抱える問題解決に「自分のできることは何か」と自己対象化して考えを拡充し自己形成につなげていくのである。(第1巻P95~99)

現場体験学習は、フィールドワークともいう。国際関係学部の学生さんにとっては、世界や地球に目を向ける必要がある。そこで、下羽ゼミでは、フィリピンスタディーツアーを計画し、現場体験学習を展開する。第2巻「フィリピンにふれるアジアに学ぶ」には、その現場体験学習の実践的展開と学生の学びの姿をあますことなく語っているのである。

調査地域として選定したところが東ビザヤ、ナポリス、タリム島などである。特記すべき価値あるフィールドスタディーは、東ビザヤの調査であ

る。1996年から始めたスタディーツアーは2004年まで毎年繰り返し行われる。東ビザヤ地域は、深刻な貧困問題を抱えるとともに多くの歴史的遺産としての戦跡がある。

フィリピンの調査地域、東ビザヤ、ナポリス、タリムのいずれも抱える問題は、「貧困」「環境」「開発」「教育」「人口」など多岐にわたるものが共通している。まさに、フィリピン固有の地域的課題であるとともに、これらは、地球的課題といわなければならない。この問題を他人事とせず、下羽ゼミ生自らの問題として意識化し、これらの問題解決のための「地域のひととの交流及び観察・調査・討論」を通した「持続的なフィールドスタディ」を行ってきたのである。ここで、見て、聞いて、感じ、考えたことを総合化して、自分たちなりの論理構造をつくっていくのである。それがやがて次に述べる「理論学習」から「発信活動学習」へと発展的に展開されていくのである。見聞し、思考・判断したことが実践行動につながらないものは意味がない。下羽ゼミの学び方の基本は、「知識と行動をつなぐ学び（1巻の副題）」であり、いわゆる「知の総合化」というものである。知の総合化は、現地体験学習への自己課題の明確化であり、調査対象としての社会や自然・文化などの環境に忠実に向かい合い地域の人々との腹藏ない出会いと語り合いがあり、このことがあるから「知の総合化」がなされる。これが下羽ゼミの「学習の原則」である。下羽ゼミは、これを徹底的に勇気をもって実践しているのである。

下羽ゼミ生は、東ビザヤの調査の中で、歴史的遺産としての太平洋戦争中の事実に出会い大きな衝撃を受ける（2巻P12～20）。私は、この部分に痛い程「共鳴」の感情にかられた。筆者の兄も南海洋で戦死したからだ。“平和のつく戦争は、絶対存在しない”とそれ以来かたい決意をもつようになったからだ。下羽ゼミ生は、戦争の犠牲になった同胞も、地域の人も、そして環境も、一時的な不幸・悲哀と葬り去るわけにいかなかったろう。だから、彼らはこれを手がかりに「平和構築への挑戦」を始める。そして、東ビザヤの平和地域構想を立て、具体的な実践行動を行うのである。そ

れが、「平和ミュージアムの設立」「レイテ島-SHS（フィリピン国立大学「地域保健・医」学部シイテ校）への支援・協力活動」「フィリピン民衆の描いた平和絵画展活動（坂戸、川越、浦和の三都市で開く）」へと発展する。この活動は、下羽ゼミ生にとって「歴史を学び、平和の創造の礎」を築くもともなったものと考えられる。それにしても、ミュージアム設立、平和絵画展開催、地域保健・医学部への支援していくには、当然の如く金がかかるわけだ。下羽ゼミでは、1999年より、独自の平和構築基金を設立したり、本の出版で得た印税やほかの寄付金などで支援活動をしたりしているというのである。学生の提言にあるようにフィリピンへのODA数十億円の援助があるがこのうち、上記のような貧困、平和、医療、教育などの活動資金が安定的に供給されたい、と願っているのに私は、同意するものである。

このほか、現地体験学習として、ドイツの人々、ドイツの社会とのふれ合い及び、韓国の学生との交流である。いずれも戦後あるいは、解放の50年の歴史をふまえて、若者同士の歴史認識の深い溝、矛盾、違いを率直に語り合っている風景を想い浮かべながら、21世紀に生きる糧を探し求めたにちがいないと思った。

下羽ゼミ生は、ドイツでの実質8日間の交流において高校、大学、NGO、強制収容所跡、壁博物館などを訪ねる。計画書には、観光らしきものが何一つない。ひたすら学び合いの旅であったようだ。文字通り、スタディーツアーなのだ。

韓国との交流は、ドイツとは趣が異なって2002年より2005年まで13回の交流を行われている。近くて遠いといわれる韓国との交流は、表面な儀礼的なものでないことだろうと想像しながら読んでいった。今日、韓国との交流は蜜になってきたとはいえ、日韓の市民に癒しがたい傷痕と痛みがある。つまり、韓国人は、植民地支配の苦悩と屈辱、人権・貧困の痛みを歴史的事実として消えることのないものとなっているからである。このような時にこそ、若い学生諸君の21世紀に生きるための智慧を生み出す努力が必要である。下羽ゼミは、「地球市民育成」と「変わる、変える（自己変革）」を

目指した。赤裸裸な対応をしている。その対応は、友人をつなくような、隣人にふれ合うような気持ちで交流がなされている。外交官のような「玄人」でなく、国際交流の「素人」として、韓国の学生、在日韓国人の大学生とが向い合う「シンポジウム」「フォーラム」などが開かれていく。そこでは、率直に、歴史認識の違いや文化の違いを越え、そして、未来の世界について語られていく。時に過去の歴史、民族、戦争などの論議がくいちがい溝を埋めることもなかっただろう。激しい論争があるから、困難なつらい想いを乗り越える道を探そうと努力する過程に共鳴・共感が得られるのであろう。これは、「わかる（理解）」「知る（認識）」の哲学的に考察したデルタイの解釈学における理解論と同根だ。真の理解とは、「人間と人間との精神の同形性」に基づいて他人の精神的産物に共鳴・共感する人間精神の働きである。知ることは、客体としての事物を主体とかわらせ、比較・分析・関係づけて認識することである。

私も中国・ネパール・ブータンなどの交流30年以上になるが、交流の過程は、新しい発見がある。知っていると思っているものが知らなかったり、誤解をしていたりしているのである。交流こそが、相手を知り己を知るといことがあるように、人間的信頼感、人間的知性を醸成するのに役立つものである。下羽ゼミ生は、交流会を重ねるうちに相手に対する深い理解と信頼感を実感していった。このことは、21世紀に生きる地球市民としての資質・能力を身につけていく機会である、と信じている。

若者の共通の悩み、楽しみも交流の中でこそ分かち合うことができるものと私は、常々思っている。下羽ゼミでは、韓国の学生、在日朝鮮の学生と三者の交流によって、二国間で解決できない課題が進まないものがスムーズに語り合い、協力、交流ができる現場体験学習をしているのである。

現場体験学習の最も有効な教育的価値は、自らの課題を持ち、予測的に現場のイメージできる事前学習を徹底的に行い、「現地の人と環境にふれ合い、出会い」その中から予測と違った新たな発見、感動が得られるところに自己変革、自己形成の動

機づけが得られるからだ。それのみではない。社会的、自然的事物、現象を科学的に探究する方法能力を身につけると共に、グローバルに世界を眺める眼を養うことができるからである。

まさに、著書の表題の通り「地球市民としての自覚にもとづく行動力」を醸成し、21世紀を担う人間形成がなされていくものである。

フィリピンスタデーツアーに参加された学生は、次のような自己評価をしている。

- ・問題への関心をもつ (93%)
- ・問題解決への動機づけとなった (57%)
- ・学習意欲を高める (67%)

このような自己評価は、一人のできるものではなく、下羽ゼミの特色である先輩(JICA)が現地に参加して全面的交流をしてくれたこと、現地の関係機関の協力のあったことなどの下羽ゼミならではの層の厚さから生み出された成果である、と考える。当然ながら下羽教授の実践的指導力があるからこそ不可能な、困難と思われるスタデーツアーが成り立つ。だから、学生は、伸び伸びと現地体験学習を可能にしているのである。

(2) 理論学習による自己確立

下羽ゼミの「理論学習」は、多様な方法論が駆使されている。著書を読み進めながら「これが理論構築の手法だ」と気づかされるところがある。それは、次の3点である。

- ①問題解決的活動による「仮説検証法」を用いている
- ②学習・研究過程で明らかにしたことを「学びのカルテ」に表現する
- ③研究成果を「概念図」に表現して、問題の所在を明確にする

①は、現場体験学習の事前学習によって、調査対象を明確にとらえるとともに「なぜ調査研究するのか」「何を明らかにするのか」「この調査研究によって自分をどう変えるのか」を確実にとらえていくことである。そして、事前研究で検討したこと、課題として把握したことによって現場体験学習で収集すべき必要とされる情報が得られるわけである。現場で収集した情報が自ら設定した目的・目標・疑問を解明達成できたか、自ら確認し

ていくわけである。解明達成の条件は、自らの目標や疑問が明確であること、同時にその目標、疑問の解明に有用な情報が得られなければならないことである。下羽ゼミ生は、現場での直接、人と出会い、環境にふれ合う活動過程に問題解決の有用な情報を得るために「鋭い観察力、コミュニケーション力」を働かせているのである。

このような現場体験学習で解明達成すべき課題が、理論学習まで持続的に展開する。これが、下羽ゼミの学習・研究の特色があるのである。理論学習は、まず一人ひとりの「学んだ後のことば(感想)」に象徴的に表出しているのである。例えば、次の〔学生の感想33(第1巻P117~118)]を引用してみよう。

しばしば、日本の抱える問題として「竹島問題」「歴史教科書」「靖国神社参拝」「北方沖のサンマ漁」が取り上げられている。しかしながら、韓国を形づくっている社会背景・基盤について私たちはどれほどまで理解しているだろうか。いまだに終結していない朝鮮南北問題、韓国国内政治が慢性的に抱えている地域格差と地域葛藤。アジアの平和希求が望まれている21世紀だからこそ、自国と相手国との関係形成には、相手国に歩み寄り様々な側面から相手を理解する作業が必要不可欠であることを、このスタディーツアーを通して実感させられた。(以下略) - さらに続いた文を要約的にまとめていくことにする -

- ・韓国が政治に敏感なのは、矛盾が蔓延しているからである。
- ・釜山、光州、ソウルへと移動、交流の中から韓国の人たちの政治への圧力に立ち向う姿、民主化にかける思いに触れ、自国の在り方、市民のあり方をふりかえる。
- ・日韓両国の課題は山積みしている。互いの市民レベルの交流によって互いに問題の克服につとめるべきである。(4年・女)

と1400字にわたって自己認識を確認しているのである。こうした「学生の感想」という一文には現場体験学習で得られた感動が綴られている。

②は、「学びのカルテ」という学習と研究の全過程がひと目でわかるように時系的に実践したこと、学んだこと、研究したことが要約されているので

ある。

西館崇の学びのカルテ(1巻P197~199)、村田論美の学びのカルテ(1巻P202~206)には、出会い、発見、感動、意欲、判断などが簡潔に記されている。例えば、西館崇(3年次)が4月入部した。たった1年間のカルテの一部を紹介したい。

- ・「学び」の意味も分からないままゼミ活動・大学の講義を無難にこなす(下羽ゼミに入る)
- ・足尾銅山に初めて現場体験-まじかに見るはげ山(鉍毒)-日本環境教育学会へ参加
- ・地元小野町(一般廃棄物)を訪問、自分の地元のこと何も知らず恥ずかしく思う
- ・ゼミ夏合宿-学園祭(公開シンポジウム開催)
- ・千葉県小金高校の総合学習「環境学」公開授業へ参加・交流
- ・ゼミ4年生追い出しコンパ(「環境問題を若者に分かってもらうための」の題のもと論争)
- ・フィリピンスタディーツアー(戦争と平和、人権、環境、開発をテーマ)に参加
- ・春の合宿

そして、カルテをかいた彼は、卒業後への期待を「やがて地元福島に帰り、福島が抱えている問題を生活者の視点から解決していきたい。」と地域市民としての生き方を求めている。

③は、学習と研究の成果を構造的に分析して図化したものである。2巻P138、140、150、3巻18、19、120、131、136には美事な問題解決、討論の過程を経てまとめたもので、これらの図を問題解決概念図、または、環境(地域)問題構造図といふことができよう。

ここに表現したことがらの問題の関係構造を考察しながら解決への提言がなされるわけである。2巻P137~148にわたって分析的に検討されている。タリム島の諸問題、人口、環境、保健・医療問題、教育問題は、「貧困」に深くかかわっているのである。このタリム島の地域的課題は、フィリピン国内、国際社会との深い相関性のあることを(2巻P142)に分析的に検討され構造化されているのである。ここに表現された問題関係構造図は、下羽ゼミ生全員の参加によって構築されたもので、下羽ゼミの共有の財産であるといえる。

(3) 「発信活動」による価値の共有

発信活動学習とは、現場体験学習と理論学習で得られたものを一般社会へ発信し、相互に地球市民の生き方、在り方を真に考え、学び合い、価値ある「人類益」「地球益」を共有することである。

単なる国益という自己中心的な国際主義を越えた「人類益」「地球益」に根ざした地球市民形成を目指して下羽ゼミは、この10年間のゼミ活動を系統的に展開してきた。

フィリピンスタディーツアーに参加した学生の〔感想35（1巻P120-124）〕は、シンポジウムや市民講座での会合での討論から「〔地域の特色をどう生かし、どう生き残っていくか〕〔そのためにはどんな要素をもった協力者が必要なのか〕を常に考えてきた。そして、壁にぶつかったまま、答えが見つからなかった。」（1巻P122）と悩みや葛藤の中で、7回のフィールドスタディの継続の力は、新たな課題が見えてくる。異なった文化・生活基盤をもつもの同士が額を寄せ合えば、抱える問題解決の方法とアイデアも生まれてくるのである。まさに、「Give&Takeの関係が成り立つ」と述べているのが印象的であった。

下羽ゼミの発信活動は、実に活発で他者への働きかけが次のように行われている。

- ・シンポジウムにおいて下羽ゼミの活動状況報告
- ・地域参加「川越サミット、パネルディスカッション」自主講座
- ・日本環境教育学における研究成果の発表（筆者は、1995年発表から毎年聞いている）
- ・出版活動（「学び方、ライフスタイルをみつける本—アクティブな地球市民になるためのゼミ」（太郎次郎記）、『私たちが変わる、私たちが変える—環境問題と市民の力／学内・国内・海外ゼミでの現場体験学習から』（リサイクル社）、今回の「地球市民になるための学び方（全3巻）」他・環境政策論文コンクールや学生論文コンクール等に多数入賞している。また、「さいたま地球環境賞受賞」などがみられる。
- ・各種雑誌論文として10数点掲載されている

・朝日新聞社説「地球人の世紀へ脱「わかっちゃいるけど」」（1998年1月15日）をはじめ、多くの新聞、週刊紙等に掲載されている。

これらのことから、下羽ゼミの活動の深さと広さを感じさせるを得ない。

3 下羽友衛の人間学的教育学

なに故、上に述べたように下羽ゼミの学習力、研究力が存在するのであろうか。

この正当な解答は言うまでもなく下羽友衛という人間的魅力のある指導力、研究力があるのではないのだろう、と想像していた。

そこで、私は、どうしても下羽友衛の学問研究と教育実践力の「根っこ」にあるもの、人間の生き方=生の原風景があるのではないか、人間=学生をふるいたたせる人間力があるのではないか、この問いを解く切実性からされた。

私は、思い切って、2005年12月15日（木曜日）突然電話で「下羽先生、明日（16日）伺ってよろしいでしょうか」といっただけで、用件を聞かずに下羽教授は「明日、午後1時から2時までならあいています」……「では伺います」

暮れのおしせまった16日、下羽教授は午後1時東武東上線「霞ヶ関」という駅まで迎えに来て下さった。

最初に案内されたところが東京国際大学「下羽研究室」である。研究室というよりも本や資料等ぎっしり詰まった書庫のようだった。これが下羽教授の学問と教育の足跡、ゼミ生指導の宝庫でもあると実感した。私の質問に応えるように積み重ねられた山のような情報群の中から「これです」と出してくれる。

私の一番尋ねたかったことは、「下羽さんは、生き方=生の原体験はありましたか」と問うことだ。まるで船が母港から次々と出航するように幼き日の探検・発見・感動・危機の入りまじった風景を描くように語ってくれた。

「魚を捕るのに網の角度を変え、位置をかえながら失敗し、10回に1回上手くすくうことができた」

「カブトムシは、いつ頃どういう場所にいるん

だろうか、探し歩いた」

「姉と成績を比べられ「なぜ、君はできないのか」と言われ、それが弱者への思いやりとなった」

など下羽友衛は、子どもなりの試行錯誤、探求心を謳歌していったようだ。私は、身をのり出して話す下羽友衛に心なしか童心のままざしに共感をおぼえた。

私は、この話から下羽友衛という「人間学」すなわち「生きた姿」から、経験から科学へのアプローチする「体験的学習理論」の根っこがあることを知る。

次に案内されたところが「3年のゼミ室（3校時）」「4年のゼミ室（4校時）」である。—もう時間を超越して—いずれも課題や指定図書をめぐる各自社会観、戦争・平和観、人間観などが語られている。4年次のゼミには、1年の学生一人がいたが、堂々と自分の体験したフィールドスタディをもとに自己認識・自己変容したことを発表する。これはデュルケームの「社会的事実としての客観性・実証性」を基礎として探究する『教育学』の本質に触れたような気がした。

最後に訪ねたところが「1年から4年までの全体のゼミ（5校時）」である。ここでは、上級生がコメンテーターになり「1年間を振り返り」「1年間の活動成果」などから「新しい課題への挑戦、活動計画」を熱心に討議していた。（40名のゼミ生）

下羽教授は、私にそれぞれのゼミの終わりにコメントするよう促がされる。その時、私は、ドイツの教育哲学者ボルノウを思い出していた。

教育学は、そもそも人間と人間との「出会う」ところに存在するものである。人間学的教育学は、教育に人間の在りようを考察する学問である、ということである。しかも、教室や地域、環境、野外などは人間形成上のフィールドである、と私は常に考えている。これは、ボルノウの「教育的雰囲気」という絶え間ない人間と人間との「出会い」の中で自主的に、主体的に思考と思想が表出し合い、磨き合い、響き合うことの大切さ、を述べたのである。

下羽ゼミの演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの年間プログラムは、知的生産の技法を習得させるとともに、パワフルな地球市民形成を目指したフィールドスタディによる「協働」「共育」の実践力を培うことを意図している。

下羽友衛の教育学は、学生という人間、フィールドにおける人間、地球に生きている人間、そして自己自身という「人間」など個々の人間の現象を人間学的に解釈するところにある。いいかえるならば、人間の成長の要因、作用、反応という現象を「自己変容」「自己形成」という教育の事実として、捉えなおしているのである。教育は、学習・研究という経験を通して、自分自身が変わることである。と同時に、他者に働きかけて、他者をも変えることであると私は考える。

私は、常々、下羽教授の飾り気のない素朴な人間性を見つめていた。ご自分は、前面に出ないで活動の最前線には、いつも下羽ゼミの学生諸君の堂々とした表情と活動の様子を伝える情報ばかりである。下羽教授は、側面からの応援をしている団長のようにも見えた。

日本環境教育学会での発表は、学部学生とはいえ、自信と意欲と希望に溢れて聴衆の私達をひきつけてくれる。

こうした、学生に対する自信と意欲・希望を醸成する努力を続けられたのは、学生自身であろうが、実に下羽友衛という教師の実践的指導力が見えてくるのである。それは、学生への学びの動機づけと学びの意欲化、目的の意欲化、細心のアドバイスをされているところにある。

学生にとって初発のゼミ参加、スタディーツアー、友人とのコミュニケーションなどどれをとっても戸惑うことばかりで、きっと途中で落伍したり、互解したりしてしまうだろう。そこを下羽ゼミの先輩としての上級生が、卒業生が学習と、研究への道筋と歩き方を示範しているのである。新入生は、上級生や卒業生を一つの学びのモデルとして“まね”“まなび”一つ一つの学習と研究の行動力を身につけていくであろう。下羽ゼミは、「なすことによって学ぶ (Lerning by doing)」「共働は人間の唯一の財産だ」という学びのスタイル

を身につけ『自分を変え 自分が変わる』という哲学を基本にもっている。

これは、ゼミ生の樋口麻美が指摘していることにつきる。下羽教授は、「共感」なき知的分析は不毛である。しかし、「知的分析」なき「共感」は危険である」という指摘である。このことは、下羽教授自身の学風であり、人間教育の原点であることを本書のすみずみから読みとることができるのである。カントの「概念なき直観は盲目であり、直観ない概念は空虚である」という命題にいきつく。下羽教授の学びの方法「現場体験学習－理論学習－発信活動学習」は、人間形成における学びの哲学である。これが下羽友衛の人間学的教育学だということだ。

下羽友衛の人間学的教育学は、彼自身の探究意欲と未来への希望から危機的遭遇に到るまで、すなわち、幼き日の原体験、留学先のキプロスでの問い、病との闘いなどから編み出された数々のドラマから生み出されたものである。

だが、今の子ども、学生、市民などは不安と不確実、不条理な政治・経済・社会環境の中で、自己を喪失し、埋没している。このような状況の中で、彼らをどのように生涯社会を生きていくか、

その生き方を自覚し意欲的・目的的に行動する方法を身につけさせるかが我々大人、教師に投げかけられた課題である。

先ず大人、教師が混沌とした社会に、危機的事態に果敢に挑戦する意欲・情熱が必要である。同時に、今日の社会環境の現実を直視し、自らの問題意識で認識を確実にすることだ。確かな認識にもとづいた行動する市民たるべきだ、と下羽友衛が語っているように、我々は、現実社会に無知・無関心であってはならない。

最後に我々教育・研究にかかわる者は、現実の地域社会、地球社会の問題状況を自ら捉え、自ら考え、自ら判断し、解決する力を磨くことである。

また、抽象論理を現実世界に結びつけると同じに自分の生き方と関連づけること、すなわち、「自己対象化」することである、と考える。

特に、教育界で欠落点は、「教育の事実・現象を基礎とした実証的・臨床的方法学」を確立することから逃避していることである。今こそ、困難なことであろうが、個々の学生の「学習と研究のカルテ」を作って指導と評価の一体化を図った一人ひとりに応じた教育活動をするを願ってやまないのである。